

明治・大正・昭和の大言論人 蘇峰の幻の「遺書」遂に刊行！

敗戦後の皇室論と独立後の時局観

——徳富蘇峰『国史より観たる皇室』を読む——

京都産業大学名誉教授
日本法制文化史

功 所

敗戦から八十年を見直す

今年は昭和二十年（一九四五）の「終戦」から満八十年になる。この間、新憲法により放棄した「国権の発動たる戦争」も「国際紛争を解決する手段」としての戦争も起きていないから、一見平和な年月が続いてきた、といえるかもしれない。

しかしながら、それは無風状態に身を任せ、何もなしに何もせずに出て来たことではない。もしも日本が国家としての續りを保つ中核の存在を失っていたならば、国内は分裂して外国の介入により抗争の

埒^{わだかま}に陥る恐れもなかったとはいえないであろう。

その中核とは、皇室（天皇）にほかならない、というような見方は、今ならば多くの方が理解し共感されるのではなかろうか。しかし、敗戦後の言論界などでは、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策や共産勢力などの教育工作と呼応して、皇室（天皇）を非難し否定するような浮説を流すことに熱心であつたとみられる。

そうした風潮に直面した一般の人々は、どう考えたらよいのか戸惑いながらも

何を為すべきか容易に思い至らなかつたのではない。それに対して、自らの信念を述べ対策を説く識者も、決して少くなかつた。その代表的な言論人が、徳富猪一郎氏（以下「蘇峰」）にほかならない。

『稀代のジャーナリスト』徳富蘇峰

蘇峰については、敗戦後も幾多の伝記、評論などが公刊されている。近年では、生誕百五十年記念として、杉原志啓・富岡幸一郎編『稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰 1863-1957』（平成二十五年、藤原書店）が公刊され、二十余名による多様な見解が収録されている。従つて、必要最小限の略述に留めておこう。

蘇峰は、幕末の文久三年癸亥（一八六三、母久子の里（肥後国上益城郡の矢島家）において、代々惣庄屋兼代官の一敏（一八三二—一九一四）の長男（姉五人あり）と

して生まれた。その父は横井小楠（一八〇九—一八六九）の門弟である。この点について、同氏自身「横井小楠……は本来山崎（開闢）学派にして……其の門人たる吾が父、及び其の弟の如きも……開闢の名たる敬義を分ち用ゐ、一敬・一義と称してゐた」（伝記学叢編『山崎開闢と其の門流』序、昭和十三年、明治書院）と記している。

このような好學の家で育つて儒書・国史を習い、熊本洋学校から京都の同志社英学校に学び、新島襄（一八四三—一八九〇）の感化を受けた。



徳富蘇峰 (1863-1957)

ついで数え十九歳の明治十四年（一八八一）、帰郷して自由民権運動に加わり、まもなく大江村の自邸内に「大江義塾」を開き、英学や歴史・政経などを青年らに講じながら、「平民主義」に立つ『第十九世紀日本の青年及び其の教育』や『将来の日本』を出版して注目された。

さらに同二十年（一八八七）東京で民友社を設立し、『国民之友』（月刊）を創刊して、多彩な言論活動を展開している。

その過程で、同十七・八年の日清戦争と「三国干渉」に直面して、従来の観念的な民権論より現実的な国権論に転じ、「文章報国」を信条に活躍した。

それのみならず、数え五十六歳の大正七年（一九一八）から『近世日本国民史』を日刊『国民新聞』に書き始めた。その五年後に帝国学士院から「恩賜賞」を授けられ、やがて八十一歳の昭和十八年

（一九四三）文化勳章を受章している。

ところが、未曾有の敗戦を境として、内外の形勢一変した。すなわち、蘇峰はその十二月、GHQから、いわゆるA級戦犯容疑「公職言論追放者」リストにあげられた。ただ、高齢（八十三歳）と疾病（三叉神経痛）のため、自宅待機となっている。そこで、翌二十一年二月から熱海の伊豆山「晩晴軒堂」において、不自由な謹慎生活を余儀なくされたのである。

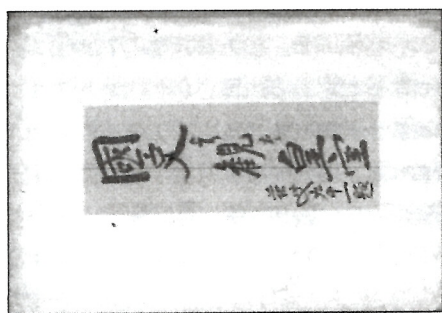
けれども、それに屈することなく、持病に苦しみながら執筆を続け、GHQの検閲に抵触しない『国史随想（平安朝の巻）』『世界の三大詩人』『敗戦学校 国史の鍵』（いずれも実業堂）および『読書九十年』（講談社）などを出版している。

さらに、数え九十歳の同二十七年（一九五二、四月）の講和独立に先立つて公職追放を解除された。そこで、郷里の水俣

にある先祖の墓に詣でたり各地へ出かけ講演も行ったが、やがて同三十二年（一九五七）十一月二日、熱海で教え九十五歳の生涯を閉じている。葬儀は遺言により赤坂の霊南坂教会で行われた。

ただ、八年前の同二十三年、静子夫人永眠の翌年に建てた多摩霊園の墓碑には「百敗院泡沫頭蘇居士／待五百年後一頭蘇八十七」と刻まれている。

『国史より観たる皇室』の由来



徳富蘇峰氏は、多彩な言論人であると共に、卓越した歴史家でもあった。歴史上の人物評論や貴重な史料解説などは、明治中期から行われてきた。それが敗戦後の公職追放により困難となったが、筆を折つて沈黙したわけではない。

しかしながら、当時懸命に書いても、その出版を引き受けるところがなく、筆底に留め置かれたままの草稿もあつた。

そのうち、重要な一つが「昭和二十一年三月十一日に稿を起し、同二十九日に終へたるもの」と自ら記す『国史より観たる皇室』（以下「本書」という）にほかならない。

その執筆動機と目的は、本書を七年後（同二十八年）出版の際に書き加えられた「小稿由来記」に明示されている。

すなわち、「当時所謂新憲法は未だ発布せられず、……我が皇室の存否に就いては群議紛々、国論頗る動揺の傾向あり。依つて予（教え八十四歳）は禁を破り、病苦呻吟の中に、其の所信の一端を披瀝することとなつた。戦犯容疑者たる予は、必ず連合諸国の裁判に付せらるべきを予期し、更に其の場合には最悪の事態（処刑）に直面すべきを慮り、せめて皇室に関する問題だけにても、予の遺言として身後（没後）に留めたく、之を敢てした」覚悟の「遺書」であつたことがわかる。

しかし、これをGHQ占領下に公表することはできなかった。それを講和独立の翌年、自費出版したのは、蘇峰を深く敬仰する藤巻正之氏である。

藤巻正之氏（明治十年／昭和四十三年）が、湊川神社宮司として奉仕の二十数年間で、最も苦心努力したのは、昭和二十年（一九四五）三月と七月の神戸大空襲により焼失した社殿などを再建して「大楠公

景仰を復活することであつた。そのため、最も傾りにされたのが晩年の「徳富猪一郎先生」にほかならない。

「徳富蘇峰記念館」には、藤巻宮司から「先生」に差し上げた書簡が四十一通ある。それによれば、既に「支那事変」の頃より神社の社報などへの寄稿を依頼している。

また、講和独立直後の昭和二十七年（一九五二）五月二十二日、「明治五年御鎮座より八十年」の機会に、本殿や拝殿などの再建と併せて「尚志館」（蘇峰の命名）を建設するため「奉賛」の文案執筆を懇請している。

さらに、本書『国史より観たる皇室』は、同四十五年（一九七〇）、熊本日日新聞社長の角田時雄氏により「新日本春秋社」より少部数出版されている。

このたび、あらためて本書を出版する

意図と意味は、まさしく蘇峰翁の遺志を受け継ぎ広めることにある。

しかも、この機会に昭和二十八年（一九五三）六月、蘇峰が来訪した青年（東京大学博士門人）に講述した「日本の行くべき道」を付載した。ここに蘇峰の大局的な世界観と将来展望が明示されている。

皇室も日本社会も、その在り方を根本的に見直さなければ立ち行かない局面にある今日、これが本書と併せて多くの方々に精読されることを念じてやまない。（本書解説より抜粋／構成・編集部）

■所 氏氏 好評既刊書

天皇の歴史と法制を見直す

現代天皇と宮廷文化の実像を解き明かし、近現代の皇室法制の成立史と問題点を概説しながら、当面必要な改革案も提示する。 三九六〇円

「天皇学」入門や三十一

「天皇学」は、日本学である。従来の「天皇史」から新たな「天皇学」への入門講座。 一九八〇円

国史より観たる皇室

【附】日本の行くべき道

徳富蘇峰

注・解説 藤巻正之

四六装丁製 予二五六頁 三〇八〇円

■好評既刊

稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰

1863-1957

杉原武雄・岡田幸一郎編 橋本秀昭／保阪正晴／松本健一／坂本多知雄／伊藤雅彦／桐原健真／西田敏／梶田明彦／新保祐司他 三九六〇円

後藤新平―徳富蘇峰

高野淳子編著 蘇峰から昭和を生きた「稀代の政治家」ジャージャーの巨頭と交わした七十通の往復書簡。二人の親交を初めて明かし、二人を軸に広がる人脈から近代日本に光を当てる。写真版で収録。 六六〇〇円

蘇峰への手紙

（中江兆良から松岡洋右まで）

高野淳子 中江兆良、坂本武、鈴木大輔、森次太郎、岡田幸一郎、柳田國男、正力松太郎、松岡洋右……徳富蘇峰が約二万二千人と交わした膨大な書簡から精選。 五〇六〇円

『碩蘇夢物語』に見る敗戦直後の徳富蘇峰

——『国史より観たる皇室』の背景—— 功 所

(京都産業大学名誉教授 日本法制文化史)

「三百年モ経テバ」と 「五百年ノ後ヲ待ツ」

歴史研究でも日常報道でも、一番必要な史料は、当事者が直接的に書いたり話した記録である。それすら正確か否か、どんな意味をもつかなど、丹念な検討を要するが、まずは一次的な史料を捜し、綿密に解説しなければならない。

たとえば、昭和二十年（一九四五）の終戦に大きな役割を果たした外務大臣東郷茂徳（82）の言動は、ご自身が東郷で闘病中に書かれた遺著『時代の一面』（初版昭和二十七年、のち公文堂）があり、また嫡孫の東郷茂彦氏著『祖父東郷茂

徳の生涯』（平成五年、文藝春秋）などに、本人の手記が活用されている。

しかも、その手記『手帳』の中で最も注目される終戦直前の部分、婿文彦氏による口述筆記が、今年（元月と六月一日）外相ゆかりの『南日本新聞』に初めて写真入りで掲載された。

それは八月七日に前日の「広島三敵機……来襲、原子爆弾投下、莫大ノ被害アリタル旨」の報をえた翌日、次のごとく記されている（凡括弧内私注、一部中略）。

「八日、早總理（鈴木貫太郎ノ）と面談（午後）四時、宮中地下第三ニ於テ拝謁（昭和天皇有儀の仰せ言）原子爆弾（米側）アレバ水際ノ戦争（本土決戦）

モ不可能ナレバ、三百年モ経テバ再起可能ナルガ如キ条件ヲ致シガナシ。有利ナル条件ヲ待ツガ為ニ勝機ヲ逸スルコト不可ナリ」——

これによつて、昭和天皇は原爆投下の甚大な被害を直視され、本土決戦を断念してボツダム宣言の受諾（敗戦）を決心されたことが判ると共に、その際「三百年モ経テバ再起可能ナルガ如キ」苛酷な条件と認識しておられたことを知りうる。

この三百年という表現は、上記の既刊書に見あたらず（敗戦後の伝聞のみ）、今回の報道には驚かざるをえない。

凡人は百年のスケールで物事を考えることすら難しいが、二千年以上の国史を熟知される天皇は、三百年先まで見通され、いま苦汁の降伏をしても、やがて再起が可能なことを信じられ、その第一歩を踏み出そうと決意されたのであろう。

ところが、さらに驚くべき事例がある。

敗戦直後、GHQにより公職追放処分を受けた徳富蘇峰翁（82）は、クリスチャンながら「百敗院泡湊蘇峰居士」との戒名を作られた。しかも二年後、愛妻静子様（82）に先立たれると、多磨霊園に墓石を立て、その中央に「五百年ノ後ヲ待ツ」と大書されている。

これは安土桃山時代から明治十年まで四百年近い『近世日本国民史』全百巻を完成間近の蘇峰翁にとって、未曾有の敗戦国日本の本格的な再興には、五百年後を見据えて信念を貫く必要があり、知己

に期待を託されたものと想われる。

敗戦後二年近く綴られた 『碩蘇夢物語』は日々の遺書

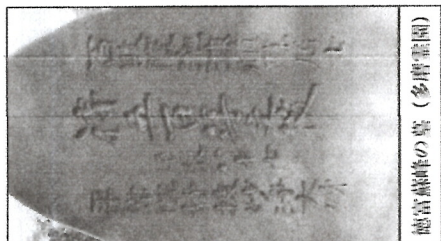
この蘇峰翁は、敗戦直後から二年近く折々に（合計四〇六回も）、リアルタイムの所感を筆直に書き続けられた。それが『碩蘇夢物語』である。

これは蘇峰翁の嫡孫敬太郎氏（一九二二—二〇〇八）が保管され、亡くなる二年前の平成十八年（二〇〇六）『徳富蘇峰終戦後日記』全四巻として講談社から公刊された。敬太郎氏による冒頭の解題によれば、これは「昭和の大戦を中心として、わが生涯の信条と行動に関し……中島司秘書に口述筆記させ、さらに和紙に墨書清書せしめ、百年以上の保存に堪える配慮まで行つた原稿である」と、また敗戦により「千年前の日本に還つ

た。百年後の復興も難しいが、必ず復興するであらう」と私に語つた」こと、さらに追記の末尾で「蘇峰は勿論わが皇室のいやさか（弥栄）を常に祈り奉つていた。そして戦後の新時代にわが御手ずから皇室に対し御参考になると思われる愛蔵の英国の王室に関する英書五冊を、昭和二十四年に昭和天皇に献上し奉つた。天皇は献納の本をお披きになり、書中に挿入した西洋新聞雑誌の切抜、または書中にアンダーラインを引いたものなどを御覧遊ばされ、「徳富もよく勉強している」と仰せられたという」ことなどが明らかにされている。

その多岐にわたる口述記録のうち、二例のみ一部中略して抄出しよう。

（一）昭和二十年九月二十八日午前記事
「君主国の日本を、米國流の民主国化するという事については、我等絶対



徳富蘇峰の著（多磨霊園）



昭和27年、89歳

に不可とする者であり……敵(米国)の虐意を助長し、日本撲滅の急先鋒となるが如き……とても勵弁の出来るものではない。」

(ロ) 翌二十一年二月十二日午前記事

「日本に国宝というものがあれば、皇室がそれである。……日本が……世界に於て、その特色を発揮しつつあるは、畢竟万世一系の皇室あるが為めである。……日本の歴史は、皇室によつて、初めて再興し……断層なくして、継続ある事を示した。」

(原文は旧仮名の筈)

これらの記述は、世界の興亡史に精通し、皇室中心の国体(国柄)を確信する蘇峰翁が、GHQにより早晚処罰され処刑されるかもしれない深刻な日々に必死で書き継いだ遺言とみて大過ない。

敗戦後から称する「頑蘇」とは、「如何なる時局の変遷にも、その初心を更へざるを意味する」と説いているという藤井賢二氏私纂版『吾舅ありけり——徳富蘇峰、筆戦一代記(平成三年刊所引)。まさに老碩学の心意気が示されている。

この頑蘇翁は、日々「夢物語」を綴るだけでなく、同二十一年(一九四六)の三月十一日から二十九日まで僅か二十日足らずで書きあげられたものが、『国史より観たる皇室』である。

それをGHQ占領下に公表することはできなかったが、講和独立後の同二十一年(一九五三)、湊川神社宮司藤巻正之氏が書

き記念という名目で自費出版されている。

その際の「小稿由来記」に「容疑者たる予は……最悪の事態に直面すべきを慮り、せめて皇室に関する問題だけにても、予の遺言として身後(没後)に留めたく、これを敢てした」と告白されている。

これを八十年近く経った今日、詳しい語注を加えて読み易くした新装版とし、それに同二十八年の口述記録「日本の行くべき道」を付載して世に出すことになった。今や新たな危機に立つ皇室と日本の在り方を建て直すためにも有用な教智が、随所に含まれていると信ずるからである。

■所功氏好評読書

天皇の歴史と法制を見直す

歴代天皇と皇室文化の美術を解く 三九六〇円

「天皇学」入門ゼミナール

「天皇学」は、日本学である。

一九八〇円

『国史より観たる皇室』より

昭和二十二年二月 徳富蘇峰
註・所功

何物にも換え難き国宝

日本にも国宝が多い。しかし、いかなる国宝とも換え難き国宝は、我が皇室である。日本の眞打は、富士の山あるが為でもなければ、奈良や日光がある為でもない。眞の眞打は、皇室そのものを日本に有するが為である。

しかるに、この皇室を粗末にし、この皇室を邪魔物にし、この皇室の打倒などということをやぶ者は、己れ自ら己れを害し、己れを傷つけ、己れを損う者であつて、いわば自殺的行動である。それに気付かないのは、余りにも無知であり、余りにも短見であり、笑止千万とはこのこ

とであらう。

皇室は日本の統制力

第一、皇室は日本の統制力である。我等の祖先が、本来日本に発生したるか、もしくは海外から移住し来りたるか、それらはしばらく学者の問題に譲ることとして、とにかく日本人が混合人種であることは間違いない。土中に遺す弥生式や縄紋式の土器を見ても分明である。蝦夷・熊襲・集人などの呼称を見ても、また出雲文化と高千穂文化とを見ても、これを察するに余りありだ。

しかして奈良朝以後においてさえも、皇別、神別、蕃別の差別が厳存したるこ

とを見ても、我等の祖先は決して単一のものでなくして、複雑のものであり、いわば一種の混合世帯であつたことが分明である。それで大和朝廷が出来た後も、永い間、地方には独立割拠の状態をなしたる者も少くなかつたことが判知る。

しかるに、これを統一し、今日においては銘々について見れば、その骨格やその容貌等、解剖学者や人類学者の眼から見れば、相当の差別は出来得るとするも、日本の隅から隅まで、誰一人日本人として通用せざる者なきまでに、人種的統一が出来たのは、誰の力であるか。はたいかなる方法によつて統一せられたるか。畢竟、皇室の力であり、同時に皇室の存在したるが為に、初めて日本人種なるものが、立派に混成して、一人種を成すに至つたもの、と言ふことが出来る。

*皇別 神別 蕃別 弘仁六年(八二五) 嵯

戦天皇の勅命により編纂された『新撰姓氏録』は、京畿内の一二八氏を由緒により三分し掲載している。そのうち「皇別」は神武天皇以来皇室から分かれた氏族(三三五氏)、「神別」は神武天皇以前の神代から統くという氏族(四〇四氏)。「蕃別」は古代の中国や朝鮮から渡来して帰化した氏族(三三六氏)。他に未分属の一七氏も記す。

民族の熔鉱炉、皇室

運輸交通の極めて不便なる上古において、異種異様の民族が各地各所に割拠しつつある時において、その国土を統一すると同時に、その民族を統一することは決して容易の業ではない。しかるに、この日本を一大熔鉱炉となし、その中に土地を統一し、人を統一し、併せて土地と人とを結着して、ここに大和民族を打ち成し、皇国日本を打出したことは、恐らくは歴史上空前絶後の事と言つても差支あるまい。

しかして、この熔鉱炉そのものが、す

なわち我が皇室であつたことを知らば、我が皇室と日本歴史とは離れ難き、又離すべからざる関係があつたばかりでなく、極言すれば皇室なければ大和民族なく、皇室なければ統一日本なく、皇室なければ今日のいわゆる皇国日本なしと言ふも、過言ではあるまい。

皇室は日本の秩序そのものなり

皇室は大和民族の枢軸であり、本幹であり、また日本国家の肇造者であるばかりでなく、またその保持者である。すなわち皇室は日本の歴史を一貫したる、一大秩序の力でありと言ふよりも、むしろ秩序そのものである。

ともかくも、日本国が国家としてその独立を全うし、またその国体を全うし、世界に比類なき一貫したる歴史を創り出したるものは、実に皇室あるが為である。

すなわち、皇室は国民と国家とを創り上げたばかりでなく、さらにこれを保存し、かつこれを發達せしめて、今日に至らしめる恩人である。

皇室なる一大求心力

日本国民、すなわち大和民族の特色の重なる一は、割拠分立、しかしてその当然の結果として、互に相争い相凌ぐことである。約して言えば、遠心力は余る程持つてゐるが、求心力にはすこぶる貧しくある。

そこで、これを自然の勢に一任し置く場合においては、日本国内に幾箇の独立国を来したらんも、未だ知るべからず。またその独立国が、大陸及び海外の諸国と連絡を取り、あるいはその国の属国となり附庸国となり、勝手の振舞をなすこととは、決して疑を容れない。

人種がかく遠心力に富むばかりでなく、地理そのものが割拠分立に便宜なるべく出来ていたからである。古き例を言へば、九州の如きは、支那三国時代までは、ほとんど独立国であつて、直接に支那と交通してゐたではないか。また最近の事実として言へば、維新の際、奥羽連盟が出来た時には、その連盟が一個の独立体となつて、政府を設け、外国と使臣の交換を企てんとし、もしくは企てたではないか。

しかるに、それらの傾向あるにかかわらず、ともかくも今日までやつて来たのは何故であるか。皇室なる一大求心力があつて、分離せんとするあらゆる力を牽制し、一切を皇室を中心として、吸引したるが為である。

(本書第一、二より抜粋)

国史より観たる皇室

〔附〕日本の行くべき道

徳富蘇峰 註・解説 〓 所功

四六装丁 二〇八頁(口絵4頁) 一九七〇円

自序

〔本書を編むための断言〕

敗戦後の皇室論と戦後の時局観 所功

国史より観たる皇室

小編 中絶

- 第一 日本の新勢力
- 第二 日本皇室の歴史
- 第三 日本の一求心力
- 第四 日本皇室の権威
- 第五 神皇正統記
- 第六 日本のおそろしき皇室
- 第七 皇室の系図と皇統
- 第八 皇室の系図と皇統
- 第九 日本皇室と神武天皇
- 第十 日本皇室の発展およびその組織
- 第十一 日本皇室の完成
- 第十二 外患と皇室
- 第十三 維新の本質と皇室
- 第十四 人皇の天降と明治天皇
- 第十五 神皇正統記の神代卷
- 第十六 皇統と神代
- 第十七 日本皇室の神代巻

〔附〕日本の行くべき道

徳富蘇峰 著 二〇八頁(口絵4頁) 一九七〇円

徳富蘇峰 著 二〇八頁(口絵4頁) 一九七〇円

■好評既刊

稀代のジャーナリスト

徳富蘇峰 1863-1957

杉原喜喜・富田善一郎 編 徳富蘇峰 著 松本健一・坂本多加雄・桐原健吉・堀田明彦・新保祐司・松浦宗・竹内洋・堀内豊彦他 明治二十年代・新進思想家として論壇・文壇・政治・経済・社会・文学・歴史等幅広く言論を繰り出し、『国民』・『国民新聞』を發行。『近世日本国民史』全八巻を書き上げた巨人の全書集 三九六〇円

後藤新平 徳富蘇峰 1895-1929

徳富蘇峰 著 専断から昭和を生きた、稀代の政治家とジャーナリズムの巨匠が交わした七十余通の往復書簡。二人を軸に広がる人脈から近代日本に光を照らす。写真版で収録。 六六〇〇円

蘇峰の手紙 中江義典から徳富蘇峰まで

徳富蘇峰 著 中江義典・坂本多加雄・堀田明彦・松本健一・堀田明彦・正力松太郎・松岡洋右……約一万二千人と交わした膨大な書簡から精選。 五〇六〇円

ルーズベルトの責任

〔日米戦争はなぜ始まったか〕 今谷 宗

Ch・A・ヒート 大統領ルーズベルトが、非戦を唱えながら日本を対米開戦に追い込む過程を資料を元に読み、48年昭和14年に『蘇峰』回覧に採られ、占領下日本でも翻訳されなかった幻の遺書。 遺に在り。 関米新聞 監訳 各四二〇円